

目次

- 1 高次脳機能障がい者に対する理学療法士の関わり

1. 高次脳機能障がい者に対する理学療法士の関わり

医療機関で高次脳機能障がいのある患者さんと接する際、一見歩行ができて日常生活は自立している方でも、実は動作が緩慢であったり拙劣であったりする場合が多い印象を受けます。



理学療法士は、主に日常生活での基本動作（寝返りや起き上がり、立ち上がり、歩行など）の獲得を目指します。高次脳機能障がいを持つ方で基本動作ができる場合でも、それぞれの動作が無理なく、楽に、効率的に行えているか？あるいは痛みなく動くことができるか？考えることが重要であると思います！



具体的にはどんな点を見たらよいか？

- ・ **全身の筋肉の状態（筋緊張）を把握。**

⇒ 特に失語症や遂行機能障がいの方は、日常生活より全身的に筋肉が緊張した状態となりやすいようです。ゆっくりとした腹式呼吸や筋肉のリラクゼーション、ポジショニング（寝る姿勢をクッションやタオルを用いて整える）を行い、余分な緊張を整えます。

- ・ **関節の柔軟性（関節可動域）**

⇒ 動作が緩慢である場合、身体の関節の動きも制限されている場合があります。身体を中心となる脊柱や、動く範囲の大きい肩関節、股関節の柔軟性は重要となり、これらの部位には痛みも生じやすいです。痛みをやわらげながら、様々な体操などで可動域を広げていきます。

- ・ **バランスの取りやすさ**

⇒ 座位や立位、片足立ちなど様々な状況を想定したバランスを評価します。いろいろな状況に応じて、身体を柔軟に動かしバランスをとれることが理想ですが、同じような動き方しかできない方も少なくありません。1人1人の動きの原因を評価し、一緒に動きながらさまざまなバランスのとり方を体で覚えていくような関わりが重要と考えます。



6月は紫陽花がきれいに咲く季節です。紫陽花には、辛抱強い愛情、一家団欒等、様々な花言葉があるそうです。